

年の瀬も迫り、新年を迎えるための準備が慌ただしくなってきました。新富町の正月料理に欠かせないものといえば、湖水ヶ池のレンコン。約200年前、高鍋藩7代目藩主・秋月種茂（あきづきたねしげ）が貧しい財政を立て直すため、地元民に栽培させたのが始まりとされます。スーパーで売られているレンコンより細長く、「糸引きレンコン」の別名があるほど繊維質が強い、日本古来の在来種です。

レンコンも特徴的ですが、古くから伝わるレンコンの掘り方も独特。池に潜って足先でレンコンを掘り当てます。中村浩二（なかむらこうじ）さんは、伝統的なレンコン掘りをやっているひとり。ウェットスーツを着て、ホースを片手に湖水ヶ池へと潜っていきます。ポンプで汲み上げた池の水をホースから出して、水の力で池底の土をほぐしながら収穫するのです。

「レンコンは『親』と『またご』の二股に分かれています、収穫するのは親の方。1本の長さが2メートルくらいあるレンコンを、右足だけで見つけて掘り出して引き上げる。途中で折れると価値が下がっちゃうんだけど、始めたばかりの頃はよく折ってたね」



池の水は底どころか数センチ先も見えないため、頼りになるのは足先の感覚だけ。深いところで水深約2メートルもあり、全身潜ることもあるそうです。この日は肩まで浸かりながら、約50分で2〜3キロものレンコン



いま新富町のこの人が気になる

#017 今月の新富人

1955年生まれ、新富町出身。小学生時代からレンコン掘りに親しみ、10年ほど前から伝統的な潜る方法でレンコンを掘っている。本業はタクシー代行の運転手。かつては長距離トラックの運転手をしていて、沖縄と北海道以外を走破したのが自慢。

レンコン掘りの達人 中村浩二さん



を掘ってくれました。泥を洗い落として、白くきれいになったレンコンに感動していると、「今日は量も長さもまあまあよ。うまい人は多いとき、2〜3時間で20〜30キロ掘っちゃうから」とはにかむ中村さん。

湖水ヶ池は水沼神社のご神体であるため、レンコンを掘れるのは水沼神社の氏子だけです。区画の割り振りは入札で決定し、自分の区画内のみ掘ることが許されています。湖水ヶ池のそばで生まれ育った中村さんにとって、レンコン掘りは身近な存在で、小学5年生の頃から毎年スコップで掘っていました。10年ほど前から潜る方法でレンコン掘りを始めたそうです。

「レンコンの時期は11月から3月だけけど、昔はみんな素っ裸でやってたから、3月しか潜ってなかった。今も風が吹いていないときにやりたいね、寒くないから」

現在、この伝統的なレンコン掘りをしているのは3人だけ。中村さんが一番若く、他の2人は70代です。「足で掘るのは、みんなやりたがらないね。息子には『親父が掘ったのを食えばそれでいい』っていわれる。たまに氏子じゃない人がやりたいというけど、次の世代へ続かないなら意味がない」

寒い時期の重労働ですが「体力が続く限り掘りたい」と中村さん。今日も足先に全神経を集中させて、潜っているかもしれません。

●新富町でご活躍されている方を編集部までお寄せください。
自薦・他薦は問いません。図総務課 ☎32・0196